

冠野 文

久しぶりに父と晩ご飯を食べた日、この本は読んだらいいと思うとメモを渡された。小黒英二の『(民主)と(愛国) 戦後日本のナショナリズムと公共性(新曜社)。図書館で借りて一通り読んだという父は、もしオマエが買うならそれを後でまた見せてもらいたいと言った。小黒本を積ん読していた私は「あの厚い本よね?もってるから読みたければまわすよ」と言ったのに、帰ってきてその本を出してみたら違う本だった。私

ったことを知った驚き、あの人はそんなことを言っていたのかという驚き、そして私のなかでは物心ついたときから評価の定まった「おじいさん」だった思想家にも、若く激しい頃があったのだというアタリマエのことを思い知らされた驚きだった。いまは禿頭の父にも、ゆたかな髪をもつ若人の日々があったはずだ。シユブレヒコールを叫んでいたのかもしれない。

「第一の戦後」と「第二の戦後」では同じ言葉でもその意味合いがかなり違っていた。たとえば「市民」。いま「市民」と使われるとき、それはイイモノとして肯定的に語られる(ケチをつけがたい相手が市民である)。「市民派」と名乗る議員は、既成の権威権力とは距離を置いていることや、人びとの自発的なつながりを自分の糧としていることを誇らしげに語る。「一市

が長く積ん読していたのは小黒の『(日本人)の境界』だった(六年も前に買った本だ)。

「この人はよく勉強してる、この時代を自分は生きてきていろいろ活動やグループにも参加してみたら知ってる、よく勉強してる人や、感心した」と父はずいぶん熱心に話したから、私は帰ったら早速あの積ん読本を読んでみようと思った。若かった頃の父が「とんだり跳ねたり」の活動をしてきたことがあるのは断片的に聞いていた。当時のことを振り返って父が口にするあれこれの言葉は、私には言動として矛盾するように感じられたこともあったし、歳をとると保守化するという実例のように思ったこともあった。

父が勧めるのと違う本が出てきたので、よけいに私は『(民主)と(愛国)』が読みたくなった。

「民」は、自分の生活圏をこえて遠く異国の地の「市民たち」への共感を語る。——こういう用法が一般化したのは「第二の戦後」である。「第一の戦後」においてはマルクス主義の用語の影響もあって、「市民」とはアルジョアの代名詞であり、「世界市民」「コスモポリタン」は国境をこえて利益を求め多国籍企業の資本家を指していた。当時、いま使われている「市民」に近い語感をもっていたのは「民族」だった。

人間はその社会にない言葉を使うことはできない。すでにある言葉を用い、それをどうにかして読みかえることで「新しいこと」が表現されてきた。小黒のこの分厚い本は、戦後思想がどのように生まれ変遷してきたのか、主として言葉とそれを発した人びとを時代の流れに位置づけながら明らか

買うのが速いと思ったが、私の枕より高い(値も高い)本を買うのに三日迷う。自分が読んだあとには父にあげたいというやく注文。二日後、持っただけで重い本が届いた。

敗戦から五五年体制の成立までを「第一の戦後」、高度経済成長に象徴されるそれ以後を「第二の戦後」とよぶという区分をまず小黒はおこなっている。いま現在からみて、「戦後」といわれるときに参照されているのは「第二の戦後」なのだという指摘は、そのあとの膨大な本論を讀んでいくうえでキモである。それとともに「いくつのときに、どこで、それを経験したか」が人びとの感覚や言動に深く関わっているという一種の世代論が語られる。

読みながら、いろいろなところで新鮮さを感じた。全然知らなかにしたものである。私は、父の経験をはんの少し感じられたように思った。若かった頃の活動にいくらかの疑問を抱き、さりとてそこから平気で離れることはできなかったという父。今でも主義主張を変えずに活動している人を尊敬するといい、でも自分はそうはできなかったという。小黒が父親との関係を「あとがき」で控えめに記しているのを読んで、私にとっての父親像もまた変わってきたことをつくづく感じた。

(かんのふみ／ほんのミニコミ)ブックマーク 編集発行人/イラストも著者

